

Title	アイデンティティーと研究
Author(s)	堀尾, 嘉幸
Citation	癌と人. 2001, 28, p. 19-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/23850">https://hdl.handle.net/11094/23850</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## アイデンティティーと研究

堀 尾 嘉 幸\*

昨年暮れごろ、新聞をなにげなく見ていたところ、第22期国語審議会の答申なるものが載っていて、その中にアイデンティティーという言葉があった。国語審議会などというのは私には全く縁がない別世界のことなのだが、外来語をどのように扱うかという表の中にその言葉

があった。その表は外来語をいくつかの群に分けて考えようというもので、具体的な外来語の例があがっていた。「定着したことば」ではスポーツなどというものが入っていて、なにを今さらわざわざと思ったのであったが、その表の「定着せず、しかも言い換えできない外国語」

としてアイデンティティー／identityという言葉があった。高校生ぐらいの時に英語の授業にこの言葉が出てきて、辞書には「自己同一性」とか書かれていて、いったいなんのことかよくわかっていないままであったことを思い出した。

identityの意味は、各々が異なっていることを前提として、その個（人）を言い表わす言葉であろう。ところが日本語にはこのidentityに対応する言葉が確かに存在しない。このような言葉がなくても日本の社会がまわっていくに何ら支障がなかったということだと思う。これは伝統的に個であること、それぞれの個を大切にすることに価値感においてはこなかったことの現れであろう。別の言い方をすると日本人は個々が違っていても気にしない度量がなかったと言えるかもしれない。逆に、英語圏では日本語にある「滅私奉公」にピッタリ相当する言葉があるのだろうか？このような日本と欧米との言葉の違いは農業社会と狩猟社会の違いとして説明されているようである。その説明があたっているかどうかはさておき、ここで、研究に話しを転じたい。以下のことはこれまでも多くの日本人が日本人に対して独創性がないと指摘してきたことでくり返しであるが話しの進行上お許しいただきたい。研究の独創性という言葉自体が抽象性を帯びているので、具体的に私なりの翻訳をして話しを進める。

これはすごいと感嘆する論文が稀にある。すごいと思うのは順当な発想を逸脱してかつ驚くべき結果を得ていたり、これまでに無いやり方を編み出したりするからであるが、私の関与する分野においてそのような仕事はどれも日本人よるものがやはり非常に少ない気がする。この理由は結局identityに起因するものと考えられる。日本の社会は集団を重んじ、個々がバラバラにあることに強い不快感を持ち、個を主張する側に逆に、罪悪感さえ持たせる伝統が確かにある。

小学校から大学まで均一と服従を重んじる教育制度が逸脱した考え方をする芽を摘み取って、均一な考え方をするクセを植え付けてきた。体質として染み付いてしまえば、飛び抜けた発想を持つことや、それを実現化することができにくくなるはずである。

「個性をいかす教育」が叫ばれてすでに久しく、今の大学生たちは個をいかす教育で育ってきたはずである。ところが、私の大学の現場では個をにじみだして、しかし、ちょっと困るようなところもあるユニークな大学生に出会うことはほとんどない。私が大学教育を受けた25年ほど前と変わらない均一な集団という印象を受ける。この点から考えるとこれまでの「個性をいかす教育」が実際には機能してこなかったのではないかと危惧する。これが研究に反映されているとすれば、将来にわたってもスゴいという研究は出にくいかもしれない。このような均一な学生であっても大学や大学院教育からでも個を主張できるように変えることができるだろうか？現在、知識の面での教育研究はさかんで、学習目標の設定とその目標へいかに到達させるかということについて大学においても大きな進歩をとげている。もちろんこのような知識教育は医師となるために不可欠である。しかし、より根源的な面での教育について、医学生物学ではまだ解明しなければならない課題が数多ある現代においては、どのような教育が真の社会貢献につながるのか研究をする立場からも真剣に考えなくてはならない。大学と大学院の教育は医学系では計10年にもわたる。どのような工夫をこらせば、将来、研究について常軌を逸したダイナミックな舵取りをできる人を少数でも養成することができるのであろうか？

---

\*札幌医科大学医学部薬理学講座  
平成11年度一般学術研究助成金交付者